

法藏における空觀の特質

——十二門論宗致義記を中心として——

張 愛 順

一 はじめに

華嚴教学の大成者、法藏はその思想体系を智儼からうけるのであった。しかし、玄奘と時を同じくする智儼は唯識の影響を強く受けながらも自らは華嚴思想の立場にたつて教学を樹立した。これに対して法藏は「性相融会」を以てその思想的立場とし、『五教章』において、

以色即是空・清淨義立 空即是色・護法義存 二義鎔融・拳体全攝。

(大正四五・五〇一a)

という。すなわち「般若は空觀の始、華嚴は空觀の終」といわれる如く、仏陀の自内証を明した華嚴を自らの拠り所とする。そこでは単に唯識を華嚴の体系の中に導入するのみではなく、むしろ空觀をおして華嚴の究極を語らんとすることによって、伝統仏教としての華嚴の立場を明確にせんとしたのではなからうか。以下、一即一切・一切即一における重々

無尽法界縁起としての法藏の空義の理解を解明せんとする。

二 法藏の空觀

法藏の空觀について、彼の多くの著作の中で特に新三論とも称せられる『十二門論宗致義記』を中心に考察してみたい。それは一に、法藏がいう如き中觀系の論書の中で『十二門論』は自ら頌と釈を以て述べた龍樹の代表的な書であること、さらに他の一は、法藏が日照三藏から空有の論争について聞くに及び彼自身、空の理解を明確に示した書の故である。勿論、日照三藏からの伝聞は『探玄記』や『起信論義記』にも述べるところであるが、そのいずれもが『宗致義記』より後の著作とされる。

ここに、法藏の最初の著作とされる『五教章』と比較するに、『宗致義記』における空の理解とは些か異なるといえる。前者が「性相融会」の立場に於て書かれたものであるに

対して、後者は全く空觀の立場より注釈されたものであることはよく知られている。しかも、今一つ彼自身、思想的に最も円熟さを加えていることが考えられる。

では、まず『五教章』三性同異義を見るに、

從因緣生即無自性 無自性故即畢竟空。(大正四五・四九九b)

と、さらに十玄緣起には、

無自性者 云何得成 一多緣起 答由無性得成 一多緣起。(同五〇三c)

とある。いずれも無自性なるが故に空といい、無自性空によつて一と多とが互いに融け合い、さまたげることがないという。しかし、無自性空にとどまっているかぎり中觀空と異ならない。従つて華嚴の円融の意味としての空と有は相即し、さらに無碍でなければならぬ。何となれば華嚴教學の思想的立場においては事事無碍の基盤は理事無碍であり、その理事無碍を支えるものは空有無碍にはかならないからである。

これに対して『五教章』に於ける三性説は眞実・依他・分別の順序をとり、さらに三性の各々に不変と隨緣、似有と無性、情有と理無との二義ありとして、眞が根抵となつてゐる。しかし、空觀の立場にたつて注釈した『宗教義記』の三性は、眞諦訳の『攝大乘論』(大正三一・一二一a)と同じく依他・遍計・円成の次第をとつてゐる。

法藏における空觀の特質(張)

では『宗教義記』に於ける三性の空觀的理解について、まず依他義に於ては、

初義中亦二義 一非有義 謂拳体全空 無所有故 二非不有義 謂不待壞彼差別相故……(省略) 二真空中亦二義 一非空義 謂以空無空相故 二非不空義 謂余一切相無不尽故 是故非空非不空 名為真空。(大正四二・二二五b)

とあつて、幻有に非有(無)と非不有(有)とがあり、体からいへば全く空であるが、それは無所有であるという。また真空にも非空(有)と非不空(無)とがあるが、有無の領域を超えなければならないといつてゐる。

さらに『五教章』に於ては三性それぞれ四句分別を用いてゐるが、ここでは依他のみにかぎる。しかし何れにせよ、三性が各々別異な三つの立場として考えられたのでないことは明確である。それらが相入れないという關係に於て矛盾するのではなく、四句を絶することによって矛盾を超えているからである。従つて四句は單に有無の關係性のみを吟味するのではなく、その何れにも執すべからざることを示すと共に円融の立場にたつ法藏自身の理解の深さを示してゐる。つまり本来的であり方として有と空とは不二であることを示す次の文は法藏の空の相即が最もよく明かされてゐる。

不異有之空 方為真空 不異空之有 方是幻有 是故此二不二 故無異也。(大正四二・二二五c)

しかし、ここで「有に異ならざるの空」と「空に異ならざるの空」という論理が、依他起の説明というより、円成実性に関する一面であるところにかえて法蔵の思想的立場をそこにみることが出来る。何となれば円成は実践が完成せられたことの意味に於て真如であり、真如なる法界に於ては依他はすでに円成に融合されるからである。

次に遍計については、

遍計所執 情有理無 此中約妄情謂有 如空華於病眼 是凡愚所取以為俗約理中実無 如空於淨眼 是聖智所知為真 此無彼有 交徹無碍 融為一性。（大正四二・二一七a）

と、病眼には存在するかの如く見える華が、淨眼には存在しない。しかもその妄情の有と理中の無とは交徹し無碍となり、融會して同一のものとなるという。すなわち有の存在理由と無の存在理由が交徹することによって無碍となつて縁起するものとなるのである。

では、円成については如何に示しているであろうか。

円成実者 此有三重 一約言就詮 亦得為俗 離言捨詮 非安立故 方乃為真 俱融無碍 以為中道 二約絶諸相故 是空義 約真德実故 是不空義 此空不空無二為中…（省略）
三約此真如当体無碍 則無所有為空 則此真体不可壊故 名不空 此空不空不二為中。（大正四二・二一七a）

という。即ち真如は言詮の証得し得ざる所であり、言詮的概

念的ではない。しかも、かかる意味に於て空である。しかし空が別にあるという意味でない故に不空である。従つて言説の世界とそれを離れた空の世界とが別々にあるのではなく、両者が同一のものであるといっている。

三 結び

法蔵の華嚴教學の抛り所が『華嚴經』であることはいうまでもないが、その注釈書の『探玄記』に於て、

一切差別教法 皆悉從縁起 從縁起故必無自性 無自性故即是真如 是故空相本尽真性本現唯是真如故。（大正三五・一一九a）

といい、無自性を真如とみる。従つて彼の空觀が円成真如の上に空義をおく所以が理解されよう。つまり法蔵は大乗の始教におかざるを得なかつた般若空と、否定が肯定に転ずることとの必然性のみを強調した中觀空とに内在する矛盾を解決し、現実そのままを真実なものとしてうけとめ、しかも真如を媒介として一切を肯定したのである。従つて華嚴の究極としての空は円教でなければならぬ。何となれば一切を肯定する重々無尽縁起こそ空にほかならないからである。

（キーワード） 法蔵、空觀、『十二門論宗教義記』

（仏教大学大学院）